

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年 5月31日現在

機関番号：11101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23730816

研究課題名（和文）サウンドエデュケーションに関わる発見学習方法論の研究

研究課題名（英文）A Study of Discovery Learning Methodology concerning Sound Education

研究代表者

石出 和也（ISHIDE KAZUYA）

弘前大学・教育学部・准教授

研究者番号：90552886

研究成果の概要（和文）：サウンド・エデュケーション（環境音を用いた音楽教育活動）を発見学習の視点から分析することにより、学習者自身がサウンド・エデュケーションを「音楽学習」として意味付ける過程を明確化した。主な論点としては、(1)授業者と学習者の共生が重要であること、(2)サウンド・エデュケーションは「場の設定」という授業構成方法と不可分であること、(3)授業者が授業場面どうしの結び付けを意識的に行うことで、「発見」を促進することができること、が挙げられる。

研究成果の概要（英文）：I analyzed Sound Education using the methodology of Discovery Learning and clarified the process that learners of sound education performed music learning. The main issues are as follows: (1)Most important, teachers and learners construct lessons together. (2)Sound Education is related with the way to make lessons that teachers only set framework. (3)By relating elements of lessons consciously, teachers can lead learners to take a step from guided discoveries to independent discoveries.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	600,000	180,000	780,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学（教科教育学）

キーワード：音楽教育，発見学習，サウンド・エデュケーション

1. 研究開始当初の背景

現在、学校音楽教育は、世界の諸民族の音楽や日本の伝統音楽を導入するなど、その大半を西洋芸術音楽に負っていた従来のカリキュラムからは大きく転換しつつある。したがって、児童生徒を取り巻くさまざまな音楽を、身体と音の相互関係（音を聴く・音を鳴らす）へと還元していくことが今まで以上に重要になるものと予想される。

カナダの作曲家 R.M.シェーファーは、

1960年代に「サウンドスケープ (soundscape)」という音楽教育的概念を提唱した。それはすなわち、人間が五感を駆使してどのように音の風景を捉えているのか、という視点をわれわれにもたらし概念である。この概念に基づく教育実践の総称は「サウンド・エデュケーション(sound education)」と呼ばれる。その方法論は多様化し、それらを根拠づける理論研究も深化しつつある。

2. 研究の目的

本研究課題の主題は「サウンド・エデュケーション」と呼ばれる、身の回りの音（環境音）の聴取を中心に据えた音楽教育実践であり、その根幹にあるのは「サウンドスケープ」という音楽教育的概念である。それまでの音楽論の多くが、あくまでも音楽作品を考察対象としていたのに対し、サウンドスケープ概念は、楽音（音楽作品のために用いられる楽器音や声）のみならず、楽音以外のさまざまな環境音をも考察対象として含める視点である。そのため、人間が音を聴く・音を生み出すといった、五感と身体性に基づく根源的な概念として、今日においても独自性を保ち続けている。いわゆる演奏家をはじめ、音で表現する側からの論理のみではなく、聴き手の存在を焦点化していくことのできるこの概念は、今後の学校音楽教育を考えていく際にも、きわめて有効な視点である。

一方、学校教育現場に目を向けると、新学習指導要領（音楽科）において、例えば「声や身の回りの音の面白さに気付いて音遊びをすること」（小学校第1・2学年：音楽づくり）や、「表現したいイメージをもち、音素材の特徴を生かし、反復、変化、対照などの構成や全体のまとまりを工夫しながら音楽をつくること」（中学校第2・3学年：創作）など示されていることも影響して、サウンド・エデュケーションに対する関心は高まりつつある。同時に、サウンド・エデュケーションを取り入れた活動の方法論も多様化し、それらを根拠付ける理論研究も深化しつつある。けれども、学校教育をはじめとする各種教育現場においては、あくまでも論拠より実践が先行する形でサウンド・エデュケーションが定着しつつあるのも確かである。

そもそもなぜ「音楽」教育が音楽以外の「環境音」を取り入れる必要があるのか。学校音

楽教育という文脈において、この点を、授業者側ではなく学習者側の視点から理論化しようとする理論研究の例は稀有である。そこで、「サウンド・エデュケーション」を支えるための方法論を「発見学習」に求めることによって、「サウンド・エデュケーション」における学習者の姿をより精緻に描き出すことが可能になるだろうという仮説のもと、本研究課題を構想した。

3. 研究の方法

拙稿(2011)において明らかにした、音楽科教育と発見学習を関係づける視点を、本研究課題ではさらに、発展的に継承する。より具体的には、水越(1975)が「制御-発見モデル」として示している発見学習の4つの段階化——①授業者による全面的な制御、②半発見、③導かれた発見、④学習者による一人立ちの発見——を今日的な音楽教育の立場から再評価し、そのうち「③導かれた発見=発見の仕方の学習」から「④一人立ちの発見=発見による学習」へと移行するプロセスにサウンド・エデュケーションを位置付けることを試みる。そうすることにより、学習者である児童生徒たち自身が、サウンド・エデュケーションを「音楽学習」としてどのように意味づけているのかという点を明らかにすることができる考えた。

平成23年度は、主に先行研究の吟味を中心に据え、発見学習を切り口とした学習者（児童生徒）の側からの理論構築を試みた。平成24年度はそうした理論基盤の上に、より実践的な意味を付与することを目指し、弘前大学教育学部附属小学校における授業実践研究を実施した。特に、実際の授業場面における学習者の発話や反応についても分析・検討を進め、学習者の「発見」を支えるサウンド・エデュケーションの授業構造上の

特徴について考察した。

4. 研究成果

(1) 「発見」の前提

—授業者と学習者の共生—

日本における発見学習研究は、アメリカの認知心理学者 J.S.ブルナーの理念を踏襲する形で創始され、広岡亮蔵や水越敏行らを中心として、実践・理論の両面において体系化されてきた。一般的には自然科学系教科のための学習方法論という認識のされ方をしている発見学習だが、1960～80年代にかけて、音楽教育分野への応用を試みた例も存在している。しかしそれらの実践を調査・分析した結果、多くの問題点が未解決のままであるということが見えてきた[詳細については拙稿(2011)を参照]。

一方で、今日実践されている音楽づくりや創作、身の回りの音を聴く学習活動などは、萌芽期の発見学習が想定していた音楽教育像には、当然ながら含まれていない。こうした比較的「最近の」音楽科教育の活動に対しては、往年の発見学習モデルを、「授業者が何を発見させたいのか」から「学習者が何を発見するのか」へと比重をずらして援用することにより、児童生徒たち自身が「学習」としてどのような意味づけを行っているのかを考察することができる。

拙稿(2012a)では、その前提として、学校音楽教育におけるサウンド・エデュケーションについて、「発見」を媒介とした授業者（教師）と学習者（児童生徒）の共生の場として捉えた。サウンド・エデュケーションという「場」は、授業者と学習者の相互作用によって形作られている。一方には具体的な活動を企画・実行する授業者がいて、もう一方には、そうした活動に参加し、それを学習として意味付けていく学習者がいる。この両者が、サ

ウンド・エデュケーションという「場」を成り立たせている。けれども、これまでのサウンド・エデュケーション研究を俯瞰すると、「授業者がどのような学習活動を提供しているのか」という視点、つまり「授業者が何をさせたいのか」という視点から論じられているものが多いことに気付く。確かに「教育」である以上、これ自体は当然のことであるが、「教師」が「教育」して「子ども」が「学習」する、という単純な図式のみでは、サウンド・エデュケーション研究のさらなる拡がり難しいことも確かである。

というのも、サウンド・エデュケーションの個々の実践が授業者の意図や意識、判断、観察方法に委ねられている一方で、実践者間で共有されているサウンド・エデュケーションの実践知が、思いのほか限られていることにも気付かされるからである（一例として、学校の授業として実施される場合と、学校教育以外のワークショップのような形態で実施される場合には、サウンド・エデュケーションの何がどう変化するのか、あるいは、小学校1年生と中学校2年生と高校3年生という発達段階の相違がサウンド・エデュケーションの内容にどのような影響を与えているのか、などが挙げられる）。

そこで、サウンド・エデュケーション研究の力点を「教師」から「子ども」へ移す、言い換えると、「授業者が何をさせたいのか」から「学習者が何をしているのか」へとその比重を移すという発想が、これまで以上に必要になってくると考えられる。「授業は無数の発見の時間であるべきだ。このことがおこるためには、先生と生徒はまずおたがいを発見しなければならない」「創造的な教え方をするためにまず最初に学ぶべきことは、口を閉じることです。もはや、あなたは先生ではありません。あなた自身も学習者なのです。

そして他の人が創っているものを観察し、そこから学ぶのです。ほとんどの先生は子供たちから学ぼうと思いません。彼らはただ教えたいのです」などの言説にも象徴されるように、シェーファーが始めた音楽教育の試みには、初期の頃からすでに「教師－子ども」を超えた共生的な発想が窺える（シェーファー1980）。音楽教育という文脈の中で「身の回りの音」という言葉からまず連想される「サウンドスケープ」の提唱者が、その初期の音楽教育活動の中ですでに、授業者と学習者の共生を説いていたことは、今一度省みられて然るべきであろう。

(2) 「発見」を支える方法

—「場の設定」と「発生的方法」—
身の回りの音（環境音）を積極的に教材化していくような学習活動の場合、そこでの「教材」とは、特定の音楽作品ではなく、学習者が発見・創造した音の蓄積によってその輪郭が形づくられるものである。しかも、「身の回りの音」や「児童生徒が発見する音」、「児童生徒が創造する音」などは、授業者が確定的に設定できる性質のものではない。したがってサウンド・エデュケーションのように、身の回りの音を教材化し、聴くこと自体を主題化していく学習活動には、歌唱、器楽、鑑賞の対象として具体的な音楽作品を設定したり、あるいは音楽作品を創作させたりするような場合とは根本的に異なる授業構造上の特徴があると言える。つまりサウンド・エデュケーションの授業構造上の特徴は、「場の設定」と呼ぶにふさわしい授業構成の方法を授業者に与えていることになる（八木2009）。

さらにこの「場の設定」を、教育内容・学習内容との関連で捉えるとき、重要な視座の一つとして「発生的方法」の考え方を位置付

けることができる。桂(2004)によれば、発生的方法とは、児童生徒の活動を、教育目的（大人の文化から引き出された知識の集積）に近づけるための手段とみなす方法ではなく、児童生徒たち自身による意味生成を学習の目的に据えた授業構成方法を指す。この発生的方法は、授業者によって用意された教育内容の獲得ではないという点で、前述した「場の設定」とあわせて、サウンド・エデュケーションの分析視点としても有効であると考えられる。

これらの理論研究に具体性を付与するため、2012年6月に弘前大学教育学部附属小学校1年生を対象とした授業実践を行った〔学会発表②③に相当。その研究成果は現在学術論文として取りまとめている〕。この授業では、例えば、あらかじめ用意することができる「楽器の音」を用いた授業場面から、実体的な形態としては事前に用意することができない「身の回りの音」を聴くという授業場面向かう流れを構成した。全てを学習者に委ねて「場の設定」を行うのではなく、それぞれの授業場面ごとの有機的な結び付けを授業者が意識的に行うことで、授業者によって「導かれた発見」と、それを起点とした「一人立ちの発見」を自然な形で繋ぐことが可能になる。その結果、授業者があらかじめ明確化させておいた教育内容を学習者が発見する場面と、学習者自身が発生的に学習内容を獲得する場面の双方を、サウンド・エデュケーションの中に見出すことが可能となった。

(3) 「発見」と「発見」の相互作用

—再発見と追発見—

上述した(1)(2)の調査研究と並行して、サウンド・エデュケーションにおける「評価」の問題についても調査研究を進めた。拙稿(2012a)では以下3点を指摘した。

①「どのように評価すべきか」という問題は「何をどのように観察すればよいのか」という問題へと還元されるべきである。その際「何を」聴き取っているのかのみではなく「誰が」聴き取っているのかに着目した観察態度も重要な意味を持つ。

②環境音を聴く学習場面においては、聴取した音の「量」と聴取の「質」との間に一種の「ねじれ」現象が存在する（より多くの音を聴取した学習者の聴取の質が優れているということではない）。

③環境音を聴く学習活動においては、個人の聴き方と集団全体での聴き方との間に一種の「ゆらぎ」が存在する（学習者間での聴き方の違い、クラス全体での聴取の仕方の共有など）。

「音を聴取する」という学習場面を考える際、この①②③はきわめて自然な視点であると言える。しかしながら、これまでのサウンド・エデュケーション研究の文脈においては、いずれも指摘されてこなかった点である。特に、「評価」の問題を検討する過程で析出されたのは、サウンド・エデュケーションを発見学習的に捉える場合、学習者が複数存在しているという事実を注視することが重要であるということであった。その点に具体性を付与するため拙稿(2012b)では、「聴いた音を視覚的にあらわす学習活動」に焦点をあて、小学校、高等学校、大学での実践事例を参照しつつ、聴取した音を学習者が「描かれたもの」として可視化するプロセスと、その「描かれたもの」を「見ること」について分析した。結果として、音楽教育場面での「描かれた音」が学習者の学びの文脈において有する可能性として、①音を記憶のみではなく記録

として残す、②音の特徴への意識づけ（「何の音」から「どのような音」への移行）、③自分自身の音の聴き方・感じ方を客観的に捉える、④聴き方の違い・描き方の違いに気付く、⑤聴き方の交換・共有、の5点を示した。特に、「描かれた音」を媒介とした「再発見」——自分自身の発見（聴き方）を再認識する——と「追発見」——他者の発見（聴き方）を自分自身も追体験する——が生起し、両者が互いに影響しあう点を確認した。

以上(1)(2)(3)が本研究課題の暫定的成果の要約である。その他、実際の学校教育現場におけるサウンド・エデュケーションの取り組みの状況を把握するため、2013年2月中旬～3月上旬にかけて、弘前市内全小学校を対象とした質問紙調査を実施した。以下に調査結果データ（設問とそれに対する回答数）の一部を示す。

【設問】ご自身で、身の回りの音（環境音）を取り入れた音楽科の授業を実施したことがありますか？

実施したことがある	19人(5.7%)
実施したことがない	280人(83.3%)
無回答	37人(11.0%)
合計	336人(100%)

【設問】身の回りの音（環境音）を取り入れた活動は、音楽科の授業にとってどの程度重要であるとお考えですか？

とても重要性を感じる	19人(5.7%)
まあまあ重要性を感じる	169人(50.3%)
あまり重要性を感じない	121人(36.0%)
まったく重要性を感じない	3人(0.9%)
無回答	24人(7.1%)
合計	336人(100%)

協力を得ることができた小学校教師 336 名のうち、全体の約 5 6 % の教師が、環境音を導入した音楽教育実践に意義を感じると回答している一方で、実際に取り組んだ経験を持つ教師は、全体の僅か 5. 7 % であることが明らかとなった。調査終了後には、(i) 調査結果を速報的に集計したデータと、(ii) 本研究課題の成果の一部をできるだけ小学校音楽科の実践に即した形で整理したもの、以上(i)(ii)を併せた内容の冊子を作成し、協力を得ることができた小学校の全教員向けに送付した。調査結果の詳細な分析については現在、学術論文として取りまとめているが、学術論文のみならず、附属学校との連携活動や、各種教員研修会などの場においても、本調査の成果を還元していく予定である。また、前述(1)(2)(3)以外にも、教員養成段階における環境音の教材化の可能性について、現在、複数の論文として取りまとめている。

【本文中で示した拙稿と先行研究例は以下】

石出和也(2011)「音楽科教育と発見学習の接点」『音楽学習研究』第 6 巻, pp.1-10.

石出和也(2012a)「サウンド・エデュケーションの学習者論」『サウンドスケープ』第 13 巻, pp.45-49.

石出和也(2012b)「「聴く子ども」と「描く子ども」の記号論」『音楽教育学』第 42 巻, 第 2 号, pp.47-49.

シェーファー(1980)『教室の扉』高橋悠治訳, 全音楽譜出版社.

Jerome Seymour Bruner, THE PROCESS OF EDUCATION, Massachusetts: Harvard University Press, 1961.

水越敏行(1975)『発見学習の研究』明治図書.
八木正一(2009)「授業構成」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社, pp.433-435.

桂直美(2004)「芸術教育の授業創造と評価の枠組みの創造的検討」『教育方法学研究』第 30 巻, pp.107-118.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

①石出和也, 「聴く子ども」と「描く子ども」の記号論, 音楽教育学, 査読無, 第 42 巻, 第 2 号, 2012, pp. 47-49.

②石出和也, サウンド・エデュケーションの学習者論, サウンドスケープ, 査読無, 第 13 巻, 2012, pp. 45-49.

〔学会発表〕(計 5 件)

①「聴く子ども」と「描く子ども」の記号論 (日本音楽教育学会第 43 回大会, 2012 年 10 月 8 日, 東京音楽大学)

②「身の回りの音を聴く学習活動」の授業構造——小学校低学年の事例を参照しながら (日本音楽教育学会第 43 回大会, 2012 年 10 月 8 日, 東京音楽大学)

③音に向かう子どもの耳——その学習内容と教育内容を考える (日本音楽教育学会北海道地区平成 24 年度地区例会, 2012 年 8 月 4 日, 北海道教育大学釧路校)

④学習過程としてのサウンド・エデュケーションの実像——観察と記述のための視点 (日本音楽教育学会北海道地区平成 23 年度地区例会, 2011 年 7 月 17 日, 北海道教育大学札幌駅前サテライト)

⑤サウンドスケープは音楽教育とともにある (日本サウンドスケープ協会 2011 年度シンポジウム, 2011 年 5 月 14 日, 山梨県立大学)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石出 和也 (ISHIDE KAZUYA)
弘前大学・教育学部・准教授

研究者番号 : 9 0 5 5 2 8 8 6

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :